



写真：文芸コンクール写真・イラスト部門【最優秀賞】電子システム工学科4年 陶國 多聞「津島ノ宮」

1.	図書館だよりに寄せて：雑感	学校長 田中 正夫	2
2.	文芸コンクール入賞結果発表《詫間》		3
3.	講評		3
4.	入賞作品紹介		
	小説	【準グランプリ】 電子システム工学科2年 久保田陽希	4
	短歌	【最優秀賞】 電子システム工学科2年 藤村 円香	7
		【最優秀賞】 通信ネットワーク工学科3年 佐野 圭亮	
	俳句	【グランプリ】 通信ネットワーク工学科3年 関子 結菜	
		【優秀賞】 1年3組 横関 美海	
		【優秀賞】 電子システム工学科2年 宮武 眞子	
	写真・イラスト	【最優秀賞】 電子システム工学科4年 陶國 多聞	
		【優秀賞】 電子システム工学科5年 河上 響	
5.	本にまつわるエッセイ《高松》		8
		【優秀賞】 創造工学専攻2年 中川 虎琉	10
		【優秀賞】 創造工学専攻2年 山地 夢十	11
6.	教員・学生による推薦図書 全19編（教員9編、学生10編）		13
7.	教員によるエッセイ	高松キャンパス 電気情報工学科 鎌元 洋一	16
8.	図書委員長より		16
9.	専攻科生より		17
10.	ビブリオバトル紹介		19
11.	ブックハンティング		19
12.	図書館からのお知らせ		19

図書館だよりに 寄せて：雑感

学校長 田中正夫



「何がある？」

図書館に収蔵されているものとしてまず思い浮かべるのは本であるが、自分自身と図書館の本との関わりを振り返ると、何十年か疎遠になったままである。小中学生の頃は学校やまちの図書館で何か好みの読み物を探して読む機会がそれなりにあった。高校生になってからは書店で本を選び自宅の本棚に並べて読むことが多くなり、図書館利用頻度は低くなり、大学生となってからはほぼなくなった。

研究室に配属となり研究テーマを持つようになると、関連学術誌の新着を確認するために大学の図書館通いはほぼ日課となった。しかしながら図書館での本の利用は復活せず、自宅にはいわゆる読書のための、研究室には講義や研究のための個人蔵書が増えつづけた。その後、学術誌の電子化が進むに従い、図書館に通う必要がなくなり、私にとって、図書館は電子ジャーナルへのポータルサイトに同じくなった。

昭和から平成に移る頃になると、図書館のような趣の品ぞろえをもつ書店が減少していったように記憶する。それに呼応して図書館利用が少し復活した。とはいっても利用するのはウェブでの蔵書検索であり、その本を手にするのは書店か通販販売サイト経由であって、図書館通いは復活しないままにある。今の自分にとって、図書館に収蔵されているものは書誌情報、というのが現状認識となる。

「本を読む？」

かつて悩まされた著作者の意図を問う試験問題に対するトラウマかもしれない。本を読むことは厭うようにはならなかったけれども、趣味の読書では作者の伝えたかったことを理解する、読み解くという大それたことは端から放棄している。本を読むときは、かなりの部分を読み飛ばしながらのとんでもない斜め読みしかできない。どこをきちんと文字通りを追い、どこを読み飛ばすのか自身でも全く分からないが、大筋を読み間違えていることはないと思っている。印象に残る事柄や目にとまった表現などには次々に葉を残しつつ、それなりに記憶にもとどめると、結果として作品に対するラフな心像ができる。読み返したい作品については、何度も適当な葉ちかくから部分読みを繰り返し、心像を何度も書きし続けることで、読み終わりのこない読書を楽しんでいる。

臆げながらも心像がすでにある作品の朗読や、それを原作とする映像に出会う機会があると、自分が作り上げ

た心像との差異に違和感を覚えることも少なくない。登場人物の配役や声音によっては観賞し続けることが難しいこともある。その一方で同じ原作の映像化などを複数観賞すると、時間がたつにつれ自分の心像からの差異が少ないところだけによる編集が記憶の中で進み、既存の心像に重畳されて妄想となる。複数の作者が同じ題材について発表した作品を読むことも同じような妄想を楽しませてくれる。作者それぞれによって取り上げる人物像やエピソード解釈が異なることから、一つの作品だけでは構築できない側面、あるいは複数の作品で重複するがそれぞれが相いれない側面が総合された心像が編集される。作者が何を伝えたかったかなどは斟酌することなく、自分なりに心像形成してよいのが、趣味の読書のたのしみである。

「行間を読む？」

読むという行為の対象は文字列であるのだが、かつて「行間を読む」ことで著作者の意図を理解しようという示唆を受けたことがある。が、趣味の読書の場合、そのような自身の分をこえたことは考えないことにして、長年過ごしてきた。行間の取り扱いについては、趣味の場合あくまで個人の裁量にあるので、あれやこれやと考えることもない。

それでは、教育研究上の本あるいは雑誌の場合どのような立ち位置になるのであろうか。自身が関わる工学系の教科書・専門書や学術的な論文においては、その主題となる議論に必要となる仮定や条件・状況などが文字列を読むだけでは定まらないのは不適切とされる。もし試験問題であるならば、出題ミスとされることになる。その意味で大切なのは、行間を読むのではなく、行間から何かを読み取ろうと考えさせないように、書き手が記述することといえる。その対として大切なことは、読み間違わないよう、文字どおりに、丹念に、正確に読むという、読み手の姿勢である。書き手の意図が読み手に伝わらないのは、きちんと書かれていないか、きちんと読めていないかのいずれかであり、どちらにもなりたくはないものである。

一方、工学・技術の現場においては、教科書や学術論文などのように全てが記述されているとは必ずしも限らず、その関連技術や各現場の暗黙の了解や仮定も存在している。そのため指示書のような技術文書においては、そこに記載されている字面だけでは唯一の状況が定まらないこともある。そのような場合に、何も書かれていない行間から自らの思い込みに従って何かを探そうとするのではなく、記載されていない内容について確認するというコミュニケーション姿勢や、さらには、前提とした現場における了解事項を適切に把握するための日常からのコミュニケーション姿勢も、読み手である技術者に求められる読解力の一部と言えるかもしれない。工学・技術教育に携わる者として、行間に思いをはせる必要のない文書作成力と、行間への思いが必要な場合に適切に対応できる広い意味での読解力を修得できるように心がけたいものである。



文芸コンクール 入賞結果発表〈詫間キャンパス〉

第6回図書館文芸コンクール入賞者表彰式を、11月10日（水）に詫間キャンパスで実施しました。コロナ対策で密を避けるため、入賞者の出席者はグランプリ・準グランプリ・最優秀賞の5名のみとしました。入賞者は以下のとおりです。



【詫間キャンパス】.....

文芸評論

優秀賞 通信ネットワーク工学科4年 音島 立哉
 優秀賞 情報工学科4年 井澤 早紀

エッセイ

優秀賞 1年2組 川西 雄暉
 優秀賞 通信ネットワーク工学科2年 三宅 和輝

小説

準グランプリ 電子システム工学科2年 久保田陽希
 優秀賞 情報工学科3年 田井 紀昭

短歌

最優秀賞 電子システム工学科2年 藤村 円香
 最優秀賞 通信ネットワーク工学科3年 佐野 圭亮

俳句

グランプリ 通信ネットワーク工学科3年 図子 結菜
 優秀賞 1年3組 横関 美海
 優秀賞 電子システム工学科2年 宮武 眞子

写真・イラスト

最優秀賞 電子システム工学科4年 陶國 多聞
 優秀賞 電子システム工学科5年 河上 響

講評

詫間キャンパス 一般教育科 国語科

図書館文芸コンクールも第6回を迎え、174人からの応募作品が集まった。以下、受賞者を中心として、部門ごとにコメントを付していく。

・文芸評論部門

読書感想文に代わり、新たに設定した部門である。異なる二冊の本を取り上げ、共通するテーマや自分の意見を論じることを目的とする。馴染みがない分野が故か応募数は少なく、読書感想文の形式となっていた作品も見られた。受賞者の井澤早紀さん、音島立哉さんの作品は両者ともに、偶然ではあるが、「星の王子さま」をとりあげている。しかし、本から取り上げたテーマは「時間」・「幸せ」と異なるもので、それぞれが選んだ二冊目と組み合わせることによって、思考を深め独自の主張をもった評論文に仕上げている。客観的な視点を持って、自身の

主張を展開している点が評価に繋がった。ただし、両者ともに文章構成に努力が欲しい点が見受けられ、最優秀賞の選定は見送りとなった。

・エッセイ部門

エッセイは形式に制限がなく、作品構成における自由度が非常に高いジャンルである。受賞者の三宅和輝さんの作品は曾祖母との思い出を、川西雄暉さんの作品は夏休みの一コマを切り取った作品である。自身の体験を中心として、そこから生まれた思いを述べている。何気ない日常を取り上げながらも、自身の主張へと文章を展開させた点が評価に繋がっている。しかし、どちらの作品ともに多くの体験や記憶を一つの文章内に詰め込んでいるがために、各エピソードの印象が薄まってしまっている。エッセイは自由度が高いだけに、エピソードの取捨選択・自身の主張の論理的な説明が重要になってくる。今回のエッセイ部門は作品数も少なく、全体的に論理性が今ひとつの作品が多かった。総合的に判断し、最優秀賞の該当はなしとした。

・小説部門

今年の小説部門は応募数が非常に多く、どの作品も力作揃いであった。いずれも分量が多く、世界観の設定の拘りや表現の工夫が施された作品が多く、非常にレベル

が高い争いとなった。準グランプリの久保田陽希くんの「器」の作品は、テーマや世界観こそ特別なものではないが、評価すべきポイントは圧倒的なほどの文章の読みやすさ、一貫性にある。起承転結がつけられ、文章のまとめ方が格段に優れており、準グランプリにふさわしいという評価に繋がった。優秀賞の田井紀昭くんの「缶コーラ」は一つ一つの描写が丁寧で、テンポ良く話が進んでいく点が評価できる。この他にも受賞には至らなかったが読み応えがある作品が多く、今後の更なる発展が期待される部門であった。

・短歌部門

短歌部門・俳句部門ともに「マスク」がテーマに設定された。コロナ禍の中で以前とは変化した「マスク」の意味をどのように捉えるかが表現のポイントとなった。その中で今回受賞作品は、いずれも「マスク」を直接的に捉えるのではなく、様々な意味を組み合わせることで作品の中に落とし込むことに成功している。藤村円香さんの作品は、自身における他者のイメージを「マスク」と捉え、華やかさの裏にある影の世界を表現することに成功している。佐野圭亮くんの作品は「マスク」をサブネットマスク・仮面と掛詞的に捉えて表現しているのが興味深い。「論理積」「定義」と音を合わせ、リズムの面でも工夫が見られる。両者ともに非常に凝った作品であり、審査員がつけた総合の評価点もほぼ同一であった。そこで、両者ともに最優秀として評価した。短歌は口ずさんだ際の音やリズムも非常に重要となってくる部門である。今後の作品づくりのヒントとして参考にしてほしい。

・俳句部門

元々「マスク」は冬の季語である。だが、コロナ禍による変化によって、冬に限られた言葉でなくなった。今回の俳句部門はこのイメージ変化を、限られた字数の中でどのように生かすことができるかが見所となった。多くの応募者が日常使いのマスクを話題とする中で岡子結染さんは、雲間から表われた星空の情景を切り取り、マスクを外した顔と重ね合わせて表現した。マスクを直接的に使用せずとも、その情景をイメージさせることに成功している。星空とマスクを結びつける瑞々しい感性、言葉選びが特に優れているとして、今回の文芸コンクールのグランプリとして選定した。優秀賞の横関美海さんの作品は、祭と布マスクという本来の季節感から見るとアンバランスな情景を切り出している点に面白みがある。宮武眞子さんの作品は、マスクについての口紅という表現が鮮やかなイメージをもたらし、読み手に寂しさと余韻を与えている。応募者が多い俳句部門であるが、実は季語の選定、制限された中での言葉選びは容易ではない。一つ一つの言葉の響きやイメージに注目し、語彙力を身につけていくことも重要となってくる。

今回は部門によって最優秀選出に至らない部門もあったものの、受賞作品は自身の描きたい思いと真摯に向き合う姿勢が見受けられた。自身の内なる何かを表現したい、という思いを受賞に至らなかった応募者も含めて大切にしてほしい。各自が少しずつ文芸の世界に触れることで、表現の幅を広げていくことを国語科としては願っている。

入賞作品紹介

〈詫間キャンパス 小説〉

準グランプリ

器

電子システム工学科2年 久保田 陽希

寝ぼけ眼で机に座る。薄く開いた瞼から入る朝の光はととても眩しく、柔らかな布団が恋しくなる。机に用意されたお茶を飲み干す。それと同時にため息が出る。

また始まってしまった。つまらない一日が。何の変哲もない24時間が。別に受けたくもない授業を受け、なんとなく会話をし、なんとなく笑い、家に帰って、布団に入る。こんなことを繰り返すうちに、自分が意思の無い人形になっていってるような、そんな気がした。いつてきますと言い、家を出る。机の上には空のコップだけが残されていた。

「ねえねえ、明日からの校外活動の希望用紙、もう出した？」
「あ、だしてないや！ほんとめんどくさいよねー。」

放課後、堀江さん達の会話が聞こえた。それと同時に、机の中に何も書かれていない紙を見つける。

「やっばい…完全に忘れてた…」

校外活動。地域のお店に足を運んで、そこで実際に仕事をして、様々な体験を通して地域社会を見る…といったものだ。

正直、仕事とか社会について興味は微塵もない。私は、この退屈な日常にうんざりしている。少しでも退屈でなくなるのなら、私はなんだっていい。

「沢渡はもう出した？」

堀江さんがそう私に聞きながら近寄ってくる。

「まだ出してないんだ。忘れちゃって…」

「そうなんだー。あ、うちら駅前のヨコイにしたんだけど、一緒に行かない？」

「そ、そうだね。そうするね！」

「楽しみだねー。」

そう言いながら彼女は友人の元に帰っていった。彼女の背中を見ながら、小さくため息をついた。

堀江梨花はいわゆる「クラスの人気者」だ。明るくて、可愛くて、友達も沢山いる。嫉妬してしまうほどに完璧な人だ。私は一応、彼女のグループに入っている。けれども、たまに話をしたり、遊んだりするくらいで、そこまで深い仲とは言えない。

堀江さんみたいな人は毎日楽しいんだろうなあと思った。変な気分になった。胸の奥がきゅっと締め付けられるカンジ。希望用紙に「ヨコイ製菓店」と書きなぐって、教卓に叩きつけた。そして、足早に家に帰った。

次の日学校に行くと、黒板に紙が貼られていた。それには、校外活動の誰がどこに行くかといった情報が記さ

れていた。

私はそれを見ながら、めんどくさい事になったなあ…と
考えていた。「岩崎骨董品 沢渡真帆」と書かれてあった。
「沢渡、一人だけなの？」

紙を見た堀江梨花が私に問いかける。

「そうみたい…。人数制限あったんだね…。資料見てな
かったや。」

「それでも一人班なんてやばいよねー。先生に聞いてみ
る？」

うーん…。と言いながら私は希望用紙を見てみた。そ
こには、「岩崎骨董品、一名のみ。」といった表記があっ
た。

「このお店、一人だけしか募集してなかったみたい。だか
ら誰も希望しなかったんだろうね。」

「ほんとだ…。なんかごめんね！」

「いいよ！気にしないで！堀江さんはみんなと楽しんで！」

必死の作り笑いで答える。本当は一人で行くなんて嫌
だ。けど、もう決まった事だから仕方がないと受け入れ
るしか無かった。

でも、どこか期待する気持ちもあった。この「岩崎骨董
品」という店に行くことで、何か退屈を少しでも和らげて
くれるものが見つかるのではないかといった気持ちが。

その日の夜、布団に入って、ふとスマホのグループ
チャットを見ると、堀江さん達が校外活動の話で盛り上
がっていた。私以外みんなが同じお店に行くのか。スマ
ホの画面があまりにも眩しくて、私はそっと電源を切っ
た。嫌な気持ちと期待の気持ちが混ざって頭が痛くなっ
た。その後すぐに寝た。

「岩崎骨董品」は通りから外れた所にひっそりと佇んで
いた。木造の平屋で、古くなっているからか、柱に沢山
の蜘蛛の巣が張られていた。でも、お化け屋敷みたいな
古び方ではなく、おばあちゃん家に来たような、どこか
懐かしさを感じるような、そんな雰囲気だった。淡い藍
色ののれんをくぐると、そこには不思議な世界が広がっ
ていた。縄文土器みたいな壺や、よく分からない銅像、
木を彫って作られた武士？みたいなものもあった。

ぼうっとそれらのものを眺めてみる。たまにはこうい
う時間も悪くないのかな…なんて考えていると、店の奥
の扉がガラガラと開いて、おばあちゃんがゆっくりと歩
いてきた。

「ああ、あなたが鳴上高の…ええっと…」

「沢渡です。沢渡真帆。これからしばらくの間、お世話に
なります。」

「沢渡さんね。ごめんねえ、一人だけ。私も歳だから、い
つも一人だけしか募集しないようお願いしてるのよ。」
「そうですか。」

ぼうりと呟いた。大変なら募集しなければいいのに。

「ところで、私は何をすればいいですか？」

「そうだねえ…。」

楽しいことがいいなあ…と考えていると、しばらく考
えていた彼女は口を開いた。

「まずは、お掃除を頼もうかしらねえ。」

掃除をしていて、退屈はしなかった。でも、楽しいも
のではなかった。岩崎さんが座っている会計所の周りは
綺麗だが、店の奥に行くにつれ、ホコリや蜘蛛の巣はど
んどん多くなっていった。

なんでこんなことしてるんだろう。今頃堀江さん達は
楽しくやっているんだろうなあ…。色んなことが頭に浮
かんできた。考えていると余計に疲れた。

岩崎骨董店はお世辞にも繁盛しているとは言えない。
近所のおじいちゃんや、物好きのマニアのような人、散
歩の寄り道がてら来たであろう人などが来ていた。彼女
はどうして骨董店を営んでいるのだろうか。

「沢田さん。もう随分綺麗になったからいいよ。ありが
と。お茶、飲むかい？」

「さわたりです。いただきます。」

貰った粗茶はぬるく、薄く濁っていた。普通においし
かった。

次の日、家に帰ってスマホを見ると、堀江さん達が
チャットで話をしていた。

「作ったスイーツおいしかったねー…か。」

ぼつりとつぶやく。楽しそうで羨ましいなあ。私は骨
董店でホコリと蜘蛛の巣掃除に明け暮れてまーす。なん
て愚痴はここでは吐けない。みんなが楽しそうに話して
いる流れを乱したら空気が読めないやつだと思われてし
まう。それに、誰も私の話なんて好き好んで聞かないだ
ろう。

その日の夜、チャットの別のグループに招待されてい
た。そこには、いつものグループと同じ顔ぶれの人が入っ
ていた。ただ一人を除いて。

菊池由奈。彼女も堀江さんのグループの一人…なんだ
けどな。おかしいなと思いつつ話の内容を見ると、

「てか、今日の由奈ウザかったよねー。」

「それな？一人だけ褒められたからって調子乗りすぎだよ
ね（笑）」

「そうそう、由奈だけいっぱいやること貰えてたしねー。
ずるいよね。」

菊池さんの悪口が連ねられていく。

「明日から無視しよー（笑）」

「それはヤバいって（笑）」

「でも、私は無視するよ。沢渡さんも、もちろん無視する
よね？」

急に私の名前が出てきて、心臓が電気ショックを受け
たように大きくはねる。冷や汗が止まらない。止めるべ
きだ。これはいけないことだ。でも、堀江梨花に嫌われ
たら、私も同じようにされるかもしれない。気持ちが競
り合いを始める。次第に呼吸のペースが早くなり、画面
が曇る。

「うん」

すぐにスマホの電源を消した。頭の中で「うん」の二文
字がこだまする。とにかくそのグループから離れたかつ
た。私はどうするべきだったのだろうか。どうするべきな
のだろうか。何も思いつかない。その日は眠ることができ
なかった。

次の日は土曜日だった。堀江梨花に遊びに誘われた。行きたくないが、断るのは怖い。重い足取りで待ち合わせの場所に行くと、案の定菊池さんだけがいない。

その日は何も楽しくなかった。けど、空気を読まなきゃいけないから、必死に作り笑いを続けた。堀江梨花はSNSに遊びの様子を投稿していた。

夜、前のチャットグループで、菊池さんが怒った様子で話をしてた。

「なんで誘ってくれなかったの？誰も誘ってくれなかったじゃん。私一人だけ誘わないとか考えられない」

「遊びに行くって言うてくれたら私も行ってたのに」

誰も返信をしない。

「なんで無視するの？なんで誰も返信してくれないの？」

私はどうすればいいのだろう。逃げたい。このグループから逃げたい。答えが見つからないまま、一日が終わった。罪悪感が私を襲う。枕に顔を埋めた。

翌朝、何も口にすることが出来なかった。机の上にはカップに満たされた苦いコーヒーが残されていた。

「沢渡さん…沢渡さん！どうしたの？ほうっとしちゃって。」

岩崎さんの声にとても驚いてしまった。

「少し考え事をして…。ごめんなさい。掃除続けます。」

昨日の出来事が頭の中を埋めつくしていた。私は、どうすべきだったのか。何を優先するべきだったのだろうか。自分の立場を気にして、酷いことをしてしまった。

私が求めていたのは、こんな毎日じゃない。退屈な毎日の方が、余程マシだ。視界が少しぼやけた。

「おつかれさま。今日もありがとねえ。はい、お茶。」

「ありがとうございます…。」

お茶は深くにごっていた。苦かった。

「何か悩み事でもあるのかい？こんな婆さんでも良ければ話を聞かせてくれないかな。」

話したい。話したいのに、話せない。溢れた気持ちが大量の涙になってポロポロと流れた。

「だ、だいじょうぶかい？」

岩崎さんは体をさすってくれた。私が泣き止むまで、ずっと。

しばらく泣いて落ち着いた頃に、私は彼女に事の経緯を話し、あることを尋ねた。

「岩崎さんは、自分がどんな行動をとるべきか迷った時、どうしますか？」

彼女はしばらく黙り込むと、ゆっくりと語り始めた。「私はね、この骨董店を主人と切り盛りしてたんだよ。ここから遠く離れたところに実家があるねえ。彼とは駆け落ちしてきたんだよ。」

「かけおち…？」

「そうだよ。両親を置いて、彼と一緒にいる決心をしたのさ。そして、ここにやって来て、骨董店を始めたんだ。ある時、彼が事故で亡くなってねえ。私はある決断を迫られたのさ。この店を捨てて、実家に帰るか、ここに残るか。私の実家はお金だけはあったんだよ。帰れば生活に苦勞することは無かっただろうねえ。」

「でも、残ってお店を続けたんですね…。」

「そうさ。私は彼との思い出を捨てたくなかった。彼が大切にしてきたこの店を、私が守らないで誰が守るんだい！ってねえ。」

「そうだったんですね…。」

「彼はここに来る人、この街、そして街のみんなが大好きだった。私もさ。私は、私の判断は間違っていないと思ってる。私は、私が正しいと思ったことを、正しいと信じ続けただけさ。沢渡さんも、自分が正しいと思ったことを信じてみたらいいんじゃないかなあ。」

話しているときの岩崎さんは、どこか切なそうな表情をしていた。話を聞いて、心の中のモヤが晴れたような、そんな気がした。今私がやらなきゃいけないことがわかった。

「ありがとうございます。私、何をすべきなのか、気付くことができました。」

「そうかい。それはよかった。気張らず、頑張るんだよ。」

ありがとうございます、と告げて、私は店を飛び出した。

菊池さんの家はグループで何度か遊びに行ったことがあるから知っていた。チャイムを押すと、出てきたのは菊池さんだった。

「…何しに来たの？」

怖い。怖いけれど、私は言わなければならない。そう、決心した。

「昨日のこと、本当にごめんなさい！私、無視するのを止めなきゃって思ったのに、仲間外れにされるのが怖くて、菊池さん無視しちゃった…。何も出来なくて…。私…。」

涙が止まらない。自分が不甲斐なくて仕方がなかった。「泣かないで。こうやって家まで来てくれて、あたしは嬉しい。だから、もう気にしないで。また、遊びに来てね。」

彼女の言葉はとても優しくかった。彼女と少し話をしてから帰った。帰り道、周りがちょっと明るく見えた。

今日は校外学習の最終日だった。店の掃除も終え、岩崎さんに昨日の出来事を話すと、彼女は良かったねと一言呟き、私にあるものをくれた。木彫りのお茶碗だった。「持っておいき。店もすっかり綺麗になったから、そのお礼。ありがとうございます。また来るんだよ。いつでも。」

「ありがとうございます。大切にします。本当にお世話になりました。」

深くお辞儀をして、店を後にした。「岩崎骨董店」をオレンジの夕日が照らしていた。

今日もまた、退屈な一日が始まる。これからも、この先も、繰り返していく。でも、そんな毎日でも悪くない。「外で待ってるよ！」

「わかった！いまいく！」

由奈からのチャットに返信をする。行ってきますと勢よく家を出た。机の上には、お木彫りの茶碗に少し残ったお茶が隙間を反射してキラキラと輝いていた。

〈説間キャンパス 短歌〉 テーマ「マスク」

最優秀賞 夜桜の 花びらが舞う この道で 君の後追う 偽りの僕

電子システム工学科2年 藤村 円香

最優秀賞 ここまでは 見せてもいいよと 論理積 見えないままなら 勝手に定義

通信ネットワーク工学科3年 佐野 圭亮



〈説間キャンパス 俳句〉 テーマ「マスク」

グランプリ 振り仰ぎ 素顔見せたる 星月夜

通信ネットワーク工学科3年 関子 結楽

優秀賞 店先に 祭さながら 布マスク

1年3組 横関 美海

優秀賞 冬の夜 侘しく佇む 擦れた紅

電子システム工学科2年 宮武 眞子

〈説間キャンパス 写真・イラスト〉

最優秀賞 津島ノ宮 (表紙に掲載)

電子システム工学科4年 陶國 多聞

優秀賞 悠悠自適

電子システム工学科5年 河上 響



本にまつわるエッセイ

〈高松キャンパス〉

教職員

「ドライブ・マイ・カー」、小説と映画

一般教育科 野口 尚志

最近の村上春樹作品の映画化では、「納屋を焼く」(『螢・納屋を焼く・その他の短編』新潮文庫)を原作としたイ・チャンドン監督の「バーニング 劇場版」(2018年)の名声は既に高いが、濱口竜介監督「ドライブ・マイ・カー」(2021年)も傑作と言える出来栄であった。

この映画の脚本は、ビートルズの曲名でもある村上の同名の短編と、「シェエラザード」「木野」の要素を取り入れて書かれている(いずれも『女のいない男たち』文春文庫)。主人公・家福(かふく)が舞台俳優で演出家という設定はそのままだが、原作にはタイトルのみ登場するチェーホフの戯曲「ワーニャ伯父さん」(『ワーニャ伯父さん／三人姉妹』光文社古典新訳文庫)を大胆に交錯させている。

家福は妻が不倫を繰り返していることを知っている。だが、そのことを話し合う機会のないまま妻は急死する。家福にとって妻の言葉と行動は巨大な謎——つまり、読み解けないテキスト——として残る。結果、家福は、手に入れられなかった幸福な人生を思って悩み苦しむワーニャと密着してしまう。家福の練習する「ワーニャ伯父さん」のセリフは、彼自身の心情から発せられたつぶやきや叫びに聞こえる。これはもはや演技ではない。家福はどうすればワーニャを「演じる」ことができるのか。

多くのテーマを含む映画だが、中でも注目したいのは、映画中の家福の舞台が多言語で上演される点である。アジア各国から集まった役者はそれぞれ母語のまま話す。日本語・北京語・韓国語・マレー語等、そこに韓国語の手話も加わる。

映画では一般に、言語の通じないさまが、個人間のコミュニケーション不全のアナロジーとして用いられることがある。旧約聖書のバベルの塔の神話はその発想の源にあるのだろうが、言語の不通は人間社会の混乱や不和の象徴なのである。

しかし、この映画の多言語は意思疎通不全の表現では終わらない。映画は舞台稽古のシーンにかなりの時間を割り、役者の演技の局面変化を追っていく。まず、台本さえ覚えておけば言語は通じなくても演技はできるから、理解したフリで演じれば良い、という段階(これは家福の夫婦関係の暗喩である)。次に必要なのは、チェーホフの紡いだテキストと対話し、自分のセリフだけでなく他者のセリフまで含めて理解することだ(家福の前には妻

という読み解かれるべきテキストがある)。そこに気づいた役者たちは言語の違いを超えて通じ合い、舞台は完成する(家福が妻というテキストの理解にどのように近づくか、これがこの映画の要である)。

この局面の変化は家福の妻というテキストの読み解きの度合いの深まりに呼応している。ただし、そのためには妻と生前に関係のあった若手俳優と、彼の車のドライバーとなる渡利みさきを中心とした導き手(いわば演出家)の存在が必要だった。

原作の「他者理解の可能性／不可能性」という(いかにも近代文学的な)問題に、映画は多言語による舞台上演という類比を用いながら答えようとしている。むろん、ここには個人の問題にとどまらず、近年不穏な形で表面化している日本とアジア各国との軋轢への視点も包含されているだろう。原作を超えて、映画はそうした射程を持つ作品にまで昇華されている。

同行二人と一台随行記

総務課 坂元 大介

子供の頃、夏休みの宿題の中でも特に「読書感想文」が苦手で毎年夏休みの終わりが近づくにつれ未だ手を付ける事すらできていない難題に怯えていたことを思い出す。そんな苦難?の末小学校を卒業し、取りあえず読書感想文からは解放され、中年になった今、またまたその難題に直面することになるろうとは、思いもしなかった。いつもお世話になっている方々からせっかく頂いた依頼なので約30年ぶりの読書感想文を書こうと四苦八苦したものの、どうしても筆が進まない。しょうがないので「本にまつわるエッセイ」と謳うにはかなり無理があるが、本校図書館でお借りした「四国八十八か所めぐり(旺文社)」を参考にしながら現在行っている、四国遍路について書き記してみることにした。

四十歳を超えた現在、昔と変わらないつもりでいても流石に心身共に変化を感じざるを得ない。若い頃は考えもしなかった遍路をしてみたいという想いがここ数年徐々に大きくなってきていた。ちょうどコロナ禍ということもあり飲み会やイベント等で他人と接触することができない社会状況だが、弘法大師様とならいくら濃厚接触しても憚られることはないだろうということで、愛車スベイシーと共に同行二人と一台で念願の「遍路(週末区切り打ちバイク遍路)」を執行することとした。

○令和3年9月下旬(8:41)自宅出発 一番札所霊山寺到着(10:14)『発願』十善戒(不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見)をちゃんと守っていると言える身では全くないが、少しでも邪心を取り払うべく身が引き締まる思いである。生活の中で「初めて経験する事」がほとんどなく

なってきた現在「遍路」は人生初の経験で、とても新鮮な感覚である。序盤のお寺はいずれも近隣にあるため、順調に次々と進んで行く。お寺毎にそれぞれ個性が強く現れておりとても興味深く、遍路の楽しさをさっそく実感する。六番 安楽寺本堂内にて「かりのよに ちぎょう あらそう むやくなり」の身に染みる文言を目にし、肝に銘ずる (12:40)。初日は七番札所十楽寺で終了 (13:01)。(14:49帰宅 走行距離142*_{km})

○令和3年10月初旬 (8:49) 自宅出発 前回終着地の十楽寺を經由し、八番、九番と順調に進む。十番札所切幡寺で三百三十三段階を休憩無しでは登り切れず、体力の衰えを痛感する (12:41)。十一番札所藤井寺の敷地内に沢山いたカマキリに秋を感じ (13:41)、いよいよ序盤最大の難所であり遍路転がしと云われる焼山寺に挑むこととなる。敢えて歩き遍路に近い県道を通るルートを選んだが、これが予想をはるかに上回る難経路で、電波が悪くスマホナビも反応しなくなり、こんな所でバイクが故障したら野垂れ死にしそうだと思わず汗をかきながら約一時間半、先の見えない極悪路を走行し、なんとか十二番札所焼山寺到着 (15:14)。たどり着くのに苦労しただけに人里離れた場所に存在する厳かな佇まいのお寺や巨木に感動を感じる。この日は独特な立地の十四番札所常楽寺まで訪れ終了 (17:06)。クタクタに疲れた。(19:14帰宅 走行距離230*_{km})

○令和3年10月中旬 (9:48) 自宅出発 七番札所十楽寺内に「愛染明王」という左右に「縁結門」「縁切門」を備え、願いに応じて入り口を選択しお参りすることでその願いが叶うと云われる仏像をお参りし忘れていたことを知り、再訪 (11:17)。両方から入りたい気持ちだが、罰が当たるといけないので片側からのみ入門。十七番札所井戸寺の中にある井戸の中を覗き込んだ (13:18) 後、徳島市を南下し、十八番札所恩山寺山門前のピランジュと云われる不思議な樹木を拝み (14:28)、十九番札所立江寺まで訪問 (15:25)。(17:43帰宅 走行距離200*_{km}) (10月末現在ここまで)

不思議なもので、あれだけ筆が進まなかったのに、一旦随行記を書き始めると今度は逆に記載スペースの少なさに窮することとなってしまった…。

万が一どこかで機会があれば二十番札所以降の随行記完結編を記載することとしたい。

いつか、歩き遍路で別格含む百八ヶ寺を巡り、煩惱と邪心に満ち満ちた心身を清めつつ現世利益を信じ、八十八使の煩惱消滅に励みたいと思う、晩秋である。



学生

高松キャンパス図書館が主催して募集した「本にまつわるエッセイ」優秀賞の表彰式を、11月9日(火)に実施しました。

表彰式では、優秀賞を受賞した2名の学生に、田中校長から賞状と記念品が授与されました。

優秀賞 創造工学専攻2年 中川 虎琉さん
「私と本」

優秀賞 創造工学専攻2年 山地 夢十さん
「ギリシャ神話を手にとって」



応募作品紹介 ※掲載は、学年順の50音順

デジタルネイティブ時代の本の活用法 創造工学専攻2年 上高 正寛

近年、インターネットの発展や進化、また電子媒体の急速な普及により、人々が情報を得る手段が多様化しています。時代の流れと共に、高密度で局所化した情報を得る手段が一般的になっている印象を受けます。それと同時に本を読む人よりも、携帯をじっと見つめて検索して知識をつける人をたくさん見るようになりました。実際に出版指標2021年版を見ると書籍の出版部数はスマートフォンの普及が始まった2010年と比べ約10%ダウン、インターネットの普及が始まった1995年と比べ約30%ダウンというデータがあります。人々が情報を得る量は変わらないと仮定すれば、本のシェアが明らかに低下していることが分かります。

私は、人に何かを教えたり、一緒に勉強したりする機会が多いのですが、皆さん基本的にはPCやスマホ等で情報を得ようとしています。その際、「わからないことがわからない」、「何と検索をすればよいかかわからない」、「情報の探し方がわからない」とよく聞きます。この時は、局所的な情報に触れたり要求したりした時に迷子に

なっています。この際の解決策はなんでしょか。そうです。体系的に学び、学んでいるのはどの辺なのかを把握しておくことです。人間は情報の把握にストーリーを付ける傾向があり、実際に単純な暗記よりも前後関係を把握した内容の方が記憶に残りやすく、理解しやすくなります。そうすれば上記のような表現ではなく、「〇〇が分からない」、「〇〇と××の関係が分からない」などの具体的な疑問点、不明点が現れるようになります。この解決策は一般的ですが、実際にはわかっているけど似たような状況に陥っている人が多いです。多すぎます。自分もあります。では、自分がそういった状況に陥ったとき、何を使って体系的に把握をするのか。そうです。本です。この場合において本は素晴らしいモノだと思っています。精査された内容、整った体裁で集中できますし、目次で全体の流れ、知識の前後関係を把握できます。体系的に記述されているが故に、文章内でも項目の関連性や時系列等の記載も多数存在します。その流れをたどれば、自分が欲しかった情報の前後関係を知ることがかなり容易になります。

こういった文章を書いていると本信者でインターネットアンチのように見えますが、インターネットも素晴らしいツールです。インターネットを介して人々は簡単に専門的な情報を知ることができるようになりました。簡単に情報を発信できるようになりました。でも検索できるまでの知識が必要です。この両者の良いところ取りができるようになった暁にはストレスなく、素早く、正確に、情報を手に入れ、難しい内容でも簡単に学ぶことができるようになっていくでしょう。

日ごろから難しい勉強を頑張っていて、さらに自分の価値を高めるために能動的に勉強しているあなたを尊敬して応援しています。是非勉強の効率化のために本を手にとってみてはいかかでしょうか。

優秀賞

私と本

創造工学専攻2年 中川 虎琉

私は生まれてこの方22年、実家住まいとして生きてきました。いわゆる大家族というやつで、7人の家族と一緒に限られた空間の中で生活してきたわけです。突然、「核家族か大家族、どっちが好み？」と聞かれても、大家族即決にするくらい、この生活スタイルが好きです。しかしながら、少なからず不満もあります。そのひとつは、自分だけの部屋を一度も持てなかったことです。

大抵のモノは手ごろな価格で買える現代と違って、祖父が幼少期を過ごした戦後すぐの日本はとても貧しかったそうです。また、祖父は5人兄弟の二男で、裕福な家庭ではなかったため「もったいない精神」を小さい頃か

ら鍛え上げられてきました。ついこないだ81歳になった今でも「もったいない精神」は健在です。先日も、単車のオイル交換の際に、どこからか引っ張りだしてきた埃まみれのオイルで財布が救われました。一方で、埃まみれのオイルのような「いつか使えそうなもの」は減多に使わないのが常で、私の家でも、オブジェクト的な収納に、貴重な生活スペースが占拠されています。その結果、私には自由に使える十分な部屋は与えられませんでした。

つらつらと愚痴を書いてしまいましたが、祖父はその他いろいろな場面で家族をサポートしてくれているスーパーおじいちゃんです。家事はほとんどしてもらっていますし、特に、私が小学生の時は、学校まで片道2.4kmもあるのに、毎日歩いて送り迎えをしてもらっていました。そのことは今でも印象的で、感謝しております。

本当は、長男である私が家督を継いで、今までお世話になった家族に恩返しをしたいのですが、私は来年から香川県を離れ、関東の企業に就職します。初めての1人暮らしが来春からスタートするわけですが、初めての自分の部屋には、壁一面に大きな本棚を設けて、たくさん本に囲まれて生活したいと考えています。私はそのくらい本が好きです。一番リラックスできる部屋に、今まで読んだ本の中でも心に残っている本を並べて、ふとした時に手に取って、読書なんてできたらなんて幸せだろうと、実家の狭い居間でよく妄想しています。

私が本を好きになれたのも家族のおかげで、私が幼い頃に、母がよく読み聞かせをしてくれていたからだと思っています。二段ベッドの上で寝ていた私に、母は横のダブルベッドから、「イシシとノシシのスッポコペッコへんてこ話」を毎晩一話ずつ読んでくれました。その本は、オオカミに捕まったイシシとノシシが、オオカミに食べられないように毎晩面白い小話をオオカミに披露するという設定で、小話の内容が非常に面白く、オオカミだけでなく私まで続きが気になって、母に「もう1話だけ」と、続きをせがんだ記憶があります。特に、タイトルが「オーボラーラ男爵」の小話は、今でもたまに読むくらい面白い物語なので、みなさんも是非読んでみてください。

私もオーボラーラ男爵のように、定年後はワイン片手に、漫談で人を楽しませることができるとおじいちゃんを目指して、来年から社会人として精進したいと思います。



優秀賞

ギリシャ神話を手にとって

創造工学専攻2年 山地 夢十

僕は、幼い頃から気弱な性格だった。気弱な性格ゆえ、ちょっかいをかけられることは少なくなかった。文房具を隠され、ドッジボールでは最初に狙われるなど、標的にされていた。小学校3年生のとある金曜日。ちょっかいをかけられ落ちこんでいた僕は、ふと学校の図書館へと立ち寄った。新しく建てられた小学校だったため、そこには多くの本が揃えられていた。日本昔話や、かいけつゾロリ、ハリーポッターなどが並べられている中、僕はギリシャ神話の本を手にとった。なぜそんなジャンルを選んだのかは明確に覚えていない。普段の授業では扱わない内容のため、特に興味を惹かれたのだろう。本を借りて、その日はトボトボと帰路へ向かった。

翌日は休みだったので、本を読んでみることにした。ギリシャ神話の本を開くと、そこには最高神である神ゼウスをはじめ、海の神ポセイドンや、学芸の神アポローンなど、百を軽く超える神々が存在する広大な世界があった。息子を迫害し、親族を幽閉する、一族間で殺し合いをおこなうことなどが日常茶飯事で、とても凄惨な内容が多かった。そんな中で、特に興味を惹かれたのは、英雄ペルセウスの物語だった。ペルセウスは、最高神ゼウスの息子であり、怪物メデューサを討伐した英雄だ。生後から海に流されるという扱いを受けながらも、母を助けるために、見たものを石に変える怪物へ果敢に挑む姿は、自分にとって理想のヒーロー像そのものだった。そんな英雄ペルセウスが立ち向かった大きな困難に比べたら、自分の悩みなど、とてもちっぽけに思えた。もちろんフィクションではあるけれど、ギリシャ神話を通じて、現実世界でも困難な状況で頑張っている人がいることを認識するようになった。それまでは、周りの人間関係や、目の前の出来事がこの世界のすべてだと思っていた。自分だけが、嫌な立場にあるのだと。しかし、実際そんなことはなく、広い地球の中の日本のさらに小さい範囲の話に過ぎない。そのことを、僕はギリシャ神話の本から学ぶことができた。世界の広さという知識によって、目の前の問題に立ち向かう勇気を得ることができた。

朝から本を読んでいたが、すでに周りは暗くなっていた。僕は、もうとっくに落ち込んでなどいなかった。休み明けに登校すると、クラスメイトからいつも通りちょっかいをかけられたが、帰り道の足取りは以前とは異なっていた。

僕にとって本とは、知識と勇気を与えてくれる存在であり、今後もそれは変わることはないと思う。現在でも悩みは尽きないが、目の前のことが苦しい時にはギリシャ神話や宇宙といった規模の大きい事柄を考えるようにしている。この世界はとても広く、自分はすごく小さな存

在に過ぎない。しかし、だからこそ、ちっぽけな自分ができる最大限のことを頑張ろうと思わせてくれるから。

本？にまつわるエッセイ

創造工学専攻1年 濱野 照真

正直悩んでいる。自分が「本にまつわるエッセイ」などと書いていいものかと。なにせ僕は活字が読めない。俗にいう「活字アレルギー」とかいうやつだ。重症なようで、どんなに興味がある内容でも、字が「ずらり」と並ぶさまを見ると「うっ」ときて読めない。恐らく原因は読書感想文だ。どんなに本が好きでも感想文と抱き合わせなら嫌いになるのは致し方無い。あんなのは即刻辞めるべきだ。強制は嫌悪の種なのだから。勉強然り労働然り、本来生きがいや趣味になり得るものを、強制によって嫌悪感を芽生えさせている。

まあそれはさておいて、そんな僕が血眼になって読み耽るものがある。それは何か。そう漫画だ。僕の部屋にはおびただしい数の漫画がある。不思議とこちらの「ずらり」には嫌悪感を抱かないものだ。

漫画は良い。ふらりと書店に吸い込まれては新刊コーナーを眺める。見覚えのある絵柄、だがしかし見たことのない絵。新刊を見つけたときは心躍る。

レジに向かう。「昔は420円ありゃ買ったのに。」そんなことを想いながら会計を済ませ、車に乗り込む。逸る気持ちが抑えられない僕は帰路に着かず、車中にてその薄く透明なフィルムを剥がすのだ。早く読みたいものだが、こいつがまた曲者。ぴったりと漫画に吸い付いて離れないそれとの闘いは、逸りを苛立ちに変えることもしばしばだ。そんな苦勞もひとしお、びりびりと敗れたそいつをがさつに丸めて袋に押し込む。鼻を衝く印刷のにおいは、より物質的な感覚となって、一層僕の物欲と収集癖を満たしてくれる。

漫画を開く。折り込まれたカバーには作者の一言が書かれている。読者への感謝を綴る者もいれば、近況報告をする者、はたまた、テキトーなことを書きなぐる者。さながら作者も一人のキャラクターである。

頁をめくると、前巻からの続きだ。あんなところで切られたのだからもどかしくてしょうがなかった。まるでテレビのコマーシャルが4ヶ月もあったような感覚。作者の魂たる絵とセリフから構築されたそれは、文字ばかりの本にはない圧倒的な躍動感と生命力で物語を紡いでいく。

感想というものは短いほど良い。沈黙は金、雄弁は銀である。真の名作の感想はため息ただ一つで良いのだ。長つたらしい感想文などは、己が心に染みわたってないからこそ出てくる灰汁に他ならないのだ。僕は張り巡らされた伏線に背筋をぞわぞわせながら一気に読み終え、深あくため息をついた。そんなこんなで、余韻に浸り、

噛み締めながら帰路につく。それが僕の漫画の嗜み方である。

本当の本好きさんには怒られてしまうかもしれない。「漫画が本なわけあるか！」とね。実際に読書感想文なんかは漫画禁止だし、読書の時間なんてのも漫画は禁止だ。漫画がない図書館も多い。高専の図書館は恵まれている。でも結構だ。活字が崇高と思うなら勝手にそう思っていればいい。それに良かったとも思っている。だって漫画で読書感想文書けてたら漫画のこと嫌いになっただかもしれないしね。

人類の敵「スマートフォン」

創造工学専攻1年 森 悠輔

中学2年生のころ、スマホを手に入れた。当時の自分にとっては夢のような道具であり、毎日飽きることを知らずに一日平均5時間は使用していた。学校の成績が落ちようがおかまいなしにだ。高専に入学してからも相変わらずいじり続けた。朝昼晩、三度の飯よりといわんばかりに。中学と違い、部活や塾に費やす時間が無くなったのでスクリーンタイムは一日平均7時間となっていた。

当時の頃を思い出すと今でもおぞましいと感じる。なぜなら、『スマホ脳』を読んだからだ。『スマホ脳』の内容をひと言でまとめると、「スマホは人間に悪影響を与える。」である。これだけの言葉なら家庭や学校、メディア等でも似たような言葉を耳にタコができるほど聞いたことだろう。しかし、『スマホ脳』は違う。世界各地の研究者による研究結果を用いて、スマホがいかに悪であるかを次々と証明していくのだ。普段何気なく使っているスマホに害があることは知っていても、どれほどの毒性をもっているかなど本書を読む以外で知りえることはないだろう。

私が驚愕した事実の1つを紹介しよう。私はインターネット検索が大好きだ。気になったことを調べ、そこで気になったことを見つけたら更に調べ続ける、いわゆるネットサーフィンをすることが私の至福のひとつだ。スマホやパソコンを持っている人は誰もがやったことのある行為の一つであり、誰もが学びを得ることのできる有意義な行いであると考えている。しかし、『スマホ脳』は否定した。脳は少しでも楽をしようとする性質があるため、調べる方法しか覚え、結果、インターネットにより得た情報そのものは覚えようとしなないのだ。また、興味のあることを調べる度にドーパミンが出るため、普段の集中力が低下してしまうことになる。

著者アンデシュ・ハンセン博士は、スマホには1利はあるかもしれないが99の害はあることを伝えている。私からすると、スマホは便利だから1や2の害はあるが計り知れない利があると考えていた。だが、著者はその言葉

の裏を返した。便利ということは、それだけ人間の脳が働かなくてもよいことになるのだ。それは脳の能力低下につながり、狩猟採集民の頃から進化していない脳が、スマホという最近生まれた道具に適応できない道理でもある。全人類を魅了するスマホは、麻薬よりもたちが悪いのだ。

私は『スマホ脳』を読んで以降、スマホの使用時間を1日2時間以内とした。本書にある悪影響を及ぼさない上限だ。するとどうだろう。趣味に時間をつくることができ、毎晩熟睡することができた。また、スマホから離れることで勉強中、スマホに手が行くことも無くなったのである。自分でわかる範囲でもこれだけの成果を得ることができたのだ。私は、自分が想像していた以上にスマホに囚われていたことがわかった。これからは、スマホとの向き合い方を考えると同時に、周りの人たちにも『スマホ脳』を薦めたいと思う。スマホの魔の手から一人でも多くの人を救うために。また、今回のような常識を覆すような良書に出会えるように趣味である読書を続けたい。



教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。



教員〈高松〉

数式を使わない物理学入門 アインシュタイン 以後の自然探検

▶ 猪木 正文 (著) 大須賀 健 (監修) (KADOKAWA)

タイトル通り、20世紀の物理学の入門書です。

なんと1965年に出版された本(この頃日本人のノーベル賞受賞者はまだ湯川秀樹だけだった)ですが、60年近くたってもまだ需要があるのは驚きで、実際に今読んでも非常に充実した内容です。

さすがに言葉が少し古いところがありますが、監修者が注を入れてくれているので、まあ、大丈夫。

子供の頃、父親が買って帰ってくれたこの本に大ハマリしたのが、将来物理学をやろうと決めたまっかけでした。(訳あって後に数学に転向しましたが。)

一般教育科教員 高橋 宏明

すごすぎる天気の本

▶ 荒木 健太郎 (著) (KADOKAWA)

肩肘張らずに読める気象現象について図などを用いてやさしく解説した本です。雲や虹などの気象現象の写真も豊富に掲載されており目も楽しませてくれます。気象現象の解説を読んでいくと色々な物理現象が顔を出してきます。

高専生のあなたなら、物理や化学で習った屈折や気体の圧縮や膨張の現象を思い出しながらより深く考えてみるとこの本がより面白く読めるかもしれません。

電気情報工学科教員 鹿間 共一

虚数の情緒—中学生からの全方位独学法

▶ 吉田 武 (著) (東海大学出版会)

本書は「勉強」を勉強する本です。主題は数学ですが、より大きなテーマである「勉強」を扱います。勉強のやり方、人類と勉強の歴史や文化、勉強に必要な数学や国語、勉強内容の応用例のような勉強に関するあらゆる物事を本書で勉強できます。

本書が特別な点は、小学校までの知識があれば読み進められることです。難しい漢字には読み仮名が振られ、数式は自然数の和と積から始まります。ここから最終的に量子力学までたどり着きます。必要な知識がすべて書かれているので、ものすごく分厚い(なんと1001ページ!)です。分厚い本を持ってカッコつけたい方にもおすすめ!

ページ数が不安なら、図書館で前書きだけでも読んでみてください。著者の思いが大変アツい文章で書かれています。もしあなたがその思いに感化されたなら、きっと最後まで夢中になって読んでしまうと思いますよ。

機械工学科教員 高谷 秀明

空想科学読本5

▶ 柳田 理科雄 (著) (メディアファクトリー)

アニメや特撮物の番組では、「〇〇ビーム」なる必殺技などの、よく考えれば非科学的な内容が含まれている。本書はそれらの「非科学的表現を真面目に科学するとどうなるか?」という点に主眼を置いている。本書は空想科学読本シリーズの第5作目に当たる。

1作目では仮面ライダーやウルトラマンといった、昔の内容であるが、本書では、ドラえもん、北斗の拳、ワンピース等の、学生たちにも馴染みのある作品を取り扱っている。

科学と名のつく本ではあるが、数式は殆ど掲載されておらず、ライトノベルのような語り口である。例えばドラえもんを題材に扱ったパートでは、「タケコプター」の実現方法と克服しなければならない課題について、研究内容をスタイルで書かれている。しかし、著者の緻密な文章構成によって、科学に興味のない読者でも一気に読み切らせてくれる内容となっている。

授業で習う内容とは程遠い内容となっているが、科学への興味関心を引き起こす導入本として、科学好き、科学嫌いの方も、まずは手に取ってみたい。

機械電子工学科教員 川上 裕介

世界の橋の秘密ヒストリア

▶ ジュディス・デュブレ (著) 牧尾 晴喜 (翻訳) (エクスナレッジ)

橋は陸地だけでなく、歴史をつなぐ! 本書では、ローマ帝国時代の強固な石造りアーチ橋から最新の斜張橋までの美観性に富んだ世界中の橋が紹介されています。橋の主目的である通行機能に止まらず、ランドスケープとしても魅力的な世界中の橋を知るきっかけになります。迫力のある写真を通して、2千年に亘る橋の歴史や技術の変遷、構造デザインの進化を楽しめる一冊です。土木マニアや橋マニアに限らず、是非、皆さんにおすすめしたい本です。

建設環境工学科教員 松本 将之

教員〈読間〉

身近な数学の記号たち

▶岡部 恒治・川村 康文・長谷川 愛美・本丸 諒・松本 悠 (著)
(オーム社)

皆さんは、数学で使われる「記号」に対する疑問はありますか？例えば、足し算を意味する記号を、なぜ「+」と書くのでしょうか？これには次の2つの説があるそうです。1つ目はラテン語の「et」(andの意味)を書き崩して「+」になった、2つ目はPlusの頭文字「P」の一部だけが残って「+」になったといわれています。このように、すべての記号に成り立ちがあります。数学の記号に疑問があれば、ぜひこちらの本で調べてみてください。

一般教育科教員 大橋 あすか

サキー森の少年

▶サキ (著) 千葉 茂樹 (訳) (理論社)

サキはずいぶん昔の英国の作家で、短編小説にその持ち味があります。生誕150年を記念して、ここ数年で新たな訳本が続けて出版されています。紹介する本もその一つの短編集です。どの作品もオチの切れの良さに感心したり、読後にゾワゾワ感やモヤモヤ感を味わったりとクセになるのが魅力だと思っています。一つ一つの作品がちよっとしたスキマ時間で読めます。繰り返したまに読みたくなるのです。

通信ネットワーク工学科教員 一色 弘三

Raspberry Pi ZeroによるIoT入門

▶今井 一雅 (著) (コロナ社)

近年IoTマイコンとして様々な種類が手軽に導入できる時代になってきています。Raspberry Pi Zeroは初期のものに比べるとかなり高速で、小型、低消費電力ですし、遠隔の制御や測定を一万円以内で簡単に行うことができます。インターネットを通してGPIO制御したり、電子工作を通して手軽にアイデアを実現したい方に知っておいて欲しい内容です。

電子システム工学科教員 森宗 太一郎

まるさんかく論理学

▶野崎 昭弘 (著) (中央公論新社)

この本は、現実社会の中に潜む不思議な問題を大学の数学の先生(著者)と高校生2名との対話形式で明快に解き明かしていく。たとえば「鏡はなぜ上下を逆さまに映さないか」など。副題が「数学的センスをみがく」であるが、決して数式が多くて頭が痛くなるような本ではなく、暇つぶしにもってこいである。数学嫌いの学生は、ぜひ読んでみて下さい。読み終わったころには、論理的思考力が身についているかもしれません。

情報工学科教員 宮武 明義



学生〈高松〉

歴史のじかん

▶乃木坂 46 山崎 怜奈 (著) (幻冬舎)

私は、この本を読むことでとても歴史の面白さが伝わると思います。

この本では、教科書には載っていない歴史の出来事の裏側などが解き明かされています。例えば、「11年続いた応仁の乱」という題材を、乃木坂46の山崎怜奈さんが先生と一緒に詳しくひも解いています。彼女は乃木坂一の才女。慶応義塾大卒で屈指の歴史好き。そんな彼女が19人の先生と一緒に14のテーマについて話し合います。

他にも歴史の裏側を話し合っているので読んでみてください。

1年1組 (MS) 浪越 柊弥

まちづくりの仕事ガイドブック まちの未来をつくる63の働き方

▶饗庭 伸、小泉 瑛一、山崎 亮 (著・集) (学芸出版社)

将来はまちづくりの仕事に携わりたい。そう考えて、いざ仕事を選ぶうにも、まちづくりという仕事は幅が広い。「まち」と「つくる」という二つの言葉は簡単であるが、世の中には私たちが知っている以上のまちづくりの仕事が存在している。災害に強いまちとして復興するのも、まちの政策を考えるのも、オフィスビルを建てるのも全てまちづくりである。この本には63のまちづくりの仕事が紹介されている。もしかしたら、あなたのしたいまちづくりの仕事が見つかるかもしれない。

建設環境工学科2年 宮崎 桜

めっちゃ、メカメカ! リンク機構99→∞

▶山田 学 (著) (日刊工業新聞社)

この本は、普段から身近に使われている道具や機械などの多くに使用されているリンク機構をまとめた本です。

まず最初に、リンク機構と言葉を聞いたことはありませんか？これは、本来の動きとは異なる動きをする機械要素の一つです。例を挙げてみると、回転運動が直線運動になったり、往復運動になったりするものです。そしてこの本は、これ以外にも多くのリンク機構を図などで分かりやすく説明しているため、これからロボットを作ったりする人にはお勧めの本です。

機械電子工学科3年 佐藤 佑海

マックスウェルの悪魔

▶ 都築 司 (著) (講談社)

マックスウェルの悪魔は、火にかけたヤカンを凍らし、タイムマシンを実現させ、永久機関を動かす。存在すれば人間を墮落させるに違いないものです。

この本に登場する悪魔はオカルトのたぐいのものではなく、熱力学という学問にある法則の一つ「熱力学の第二法則」に深く関わりのあるものです。

高専生であれば熱力学を履修しなければならない人いると思います。授業と平行して読んでいけば「熱力学の第二法則」についてより深く知ることができるとも思われます。ぜひ図書館で探して読んでみて下さい。

機械電子工学科 4年 三島 大和

考え方

▶ 稲盛 和夫 (著) (大和書房)

私は、稲盛和夫さんが書いた「考え方」という本を推薦図書として推薦します。この本は、稲盛和夫さんの人生観を書いており、自分の状況を変えようとしている人や、何かに挑戦しようとしている人にはとてもびったりな本だと思います。

稲盛和夫さんとは「京セラ」や「KDDI」の設立者であり、また「日本航空」を再建した人として日本を代表する経営者の一人です。

私自身も、この稲盛和夫さんの本を読み、挑戦することへのやる気などを得ることができたので、ぜひ読んでみてください。

建設環境工学科 5年 山名 一輝

学生〈読間〉

犬も食わない

▶ 尾崎 世界観、千早 茜 (著) (新潮社)

私が最近読んだおすすめの本は「犬も食わない」という本だ。この本は一組の男女の話をそれぞれの視点で語っていくお話だ。相性も性格も出会い方も、お互いの第一印象も最悪。分かり合える関係なんて幻想なんだよと言われればかりに大きな展開があるわけでもなく生半可な展開で少しずつ二人が二人になっていく。不器用なこの二人はこの二人でしかないのだと語りかけているかのように。

この小説の見どころは、この二人は全く似ていない所だ。そして似ていないはずなのに、交わることさえないさそうな二人なのに、かすり傷のようなまじり具合がこの本に引き込まれる魅力になっていると思う。また、私はこう思う。しかし私が思っている以上に相手はこう思っている。私が思っていることも相手が思っていることもきっとそれは真実なんだろう。真実は人の数だけある。その人が思うこと。その人だからこそ感じること。

正解なんてない、迷いながらも自分でいいんだ。そんな自分だからこそ生きていけるのかもしれない。と思えるお話だ。

自分の将来や人間関係など、このままでいいのか、と思うことがこれからの人生訪れると思います。でも人生こんなもんかもしれないな、案外そんな人間で世界は回ってるんだよ、と思える作品である。ぜひ見かけたら読んでみてほしい。

1年3組 (CN) 桑内 ひより

SHOE DOG 靴にすべてを

▶ フィル・ナイト (著) 大田黒 奉之 (訳) (東洋経済新報社)

この本は現代で大きなシェアを誇るナイキ創業の実話が描かれています。ナイキエアマックスといったあの有名な靴を生み出した企業です。この本をみなさんにお勧めする理由はたった1つです。それは「最高の人生の見つけ方とは」という人生の総論ともとれる問いにフィル・ナイト (創業者) 本人が考え書き記されたものだからです。仕事に仲間に家族に全てを捧げた1人の男の物語です。今、勉強、就活、恋などに悩む全ての人へのフィルからの小さなアドバイスかもしれません。

ナイキという世界の老若男女から愛されるブランドを作った男から学ぶものは1人の技術者として学ぶこともあるかもしれません。

「SHOE DOG 靴に全てを」1度読んでみてはいかがでしょう？

電子システム工学科 3年 大平 陽翔

製品事例から学ぶ現代の電気電子計測

▶ 藤田 吾郎 (著) (コロナ社)

私はこの本を電気回路の実験のレポートを書くために借りました。

この本は実験で使用する計測器の使い方や原理を写真や図を使って丁寧に説明しています。計測器の使い方が分からないときはこの本を参考にすればほとんどが解決できます。この本は授業ではやらなかった操作が書かれていて、とても面白いです。私が特にこの本をおすすめしたい人は、3年生の情報の電気回路の実験で計測器の操作が不安な人です。実験で困ったときは是非この本を読んでみてください。

情報工学科 3年 行成 真琴

頑張りすぎずに、気楽に: お互いが幸せに生きるためのバランスを探して

▶ キム スヒョン (著) 岡崎 暢子 (訳) (ワニブックス)

4年生になって忙しくなり、なかなか自分と向き合う時間を取れない中、この本が目飛び込んできた。「頑張りすぎずに、気楽に」というタイトルと、穏やかな絵が書かれたその表紙は、とても魅力的に見えた。

実際に読んでみると、少しずつ「自分」を知り始めた今の私にとって、びったりの内容だった。自分らしく生きること。周りの人たちと、ちょうどいいバランスを保つこと。人間関係は完璧にはいかないこと。

私はときどき、思っていることをうまく伝えられずに、大切な人を傷つけてしまうことがある。そうかと思えば、意地悪な人をきっぱり突き返すことができないという悩みも抱えてきた。そんな私にとって、これらの内容はどれも、目から鱗の内容だった。だから今、私は、周りの人たちと幸せな関係を築ける気がしている。これからも何度も読み返して、「頑張りすぎずに、気楽に」生きていこうと思う。

通信ネットワーク工学科 4年 音島 立哉

キノの旅

▶時雨沢 恵一（著）（角川書店）



この物語は、人間のキノと喋るモトラド（二輪車）のエルメスが、旅をしてさまざまな国を訪れていくお話である。キノたちは訪れた国々で、人間の愚かさや矛盾を象徴したような人たちに出会い、いろいろなことに巻き込まれていく。そのため、下手をすると、物語を読んでいて不快な気持ちになりかねない。しかし、寡黙だが優しさがある主人公と飾り気のない文章が合わさり、おとぎ話のような物語となっている。だが、訪れた国々が抱えている問題は現代社会に実在するものが多く、風刺小説の一面もあり、いろいろな事を考えさせられる物語でもある。また、主人公のキノと相棒のエルメスの淡々としたやりとりが話の流れを邪魔せず、ほほえましくなる。あとがきが全巻個性的でとてもわくわくさせられる小説である。

情報工学科4年 植田 凜

教員によるエッセイ

稲盛経営哲学に触れて

電気情報工学科 雑元 洋一

京セラ名誉会長の稲盛和夫氏の本を何冊か読んだのですが、私の中でとても心に響くものがあり、今回はその中でミリオンセラー『生き方』の続編である『心。』について、稲盛氏の経営哲学の一端に触れた感想を書いていきたいと思っています。

「善なる動機をもてば、成功へと導かれる」というタイトルの節の中で「いかに生きるかという問いは、すなわちいかなる心をもつかと同義であり、心に何を描くかが、どんな人生を歩むかを決定する。人がもちうる、もっとも崇高で美しい心—それは、他者を思いやるやさしい心、ときに自らを犠牲にしても他のために尽くそうと願う心である。そんな心のありようを、仏教の言葉で“利他”という。」とあります。稲盛氏の経営哲学は仏教の教えと密接に関係しているようで、実社会での稲盛氏の経験、多くの場合事業を運営していくという実学が仏教の教えとリンクしているため、とても説得力があります。また、正しい善なる動機が事業を興すきっかけとなっているため、経営哲学にぶれがなく、一本の筋が通った論拠のため、シンプルでそれでいて奥が深く、また、とても理解ができるというか納得がよく考え方となっています。このことが次の文章にもよく表れています。

「事業を興すときでも、新しい仕事に携わるときでも、私

は、それが人のためになるか、他を利するものであるかをまず考える。そして、たしかに利他に基づいた“善なる動機”から発していると確信できたことは、かならずやよい結果へと導くことができた。」

このように、稲盛氏の経営哲学には、仏教の教えが背景にあり、それが実学として活きた知識や経験や実践事例として、読者にメッセージを届けてくださっています。

次にご紹介する節は「人生の目的は心を磨き、他に尽くすこと」というタイトルのものです。その中で「人生の目的とは、まず一つに心を高めること。いいかえれば魂を磨くことにほかならない。」「そしてもう一つ、人生の目的をあげるとすれば、人のため、世の中のために尽くすこと。すなわち“利他の心”で生きることである。」と語られています。これには、とても深遠な人生の真理を稲盛氏がシンプルな言葉で表現してくださっていると感じました。やはり、私自身の人生経験だけでは、とてもたどり着くことのできない人生の目的というものを本という形で羅針盤のように指し示してくださっているのであり、大変感銘を受けました。

以上が特に私の心に残った稲盛経営哲学の一端です。やはり、仏教の教えは人生の真理に通ずるものがあり、稲盛経営哲学はそれを実地の社会の中での実体験に裏打ちされた考え方や経験則なのだなあとというのが自分の感想です。また、稲盛経営哲学に限らず、松下幸之助氏の経営哲学や本田宗一郎氏の本等もとても示唆に富んだ内容で、とても一個の個人の人生経験では到達し得ない人生の真理に触れることができる考え方というか教えなのだと思います。以上、つたない文章ですが、稲盛経営哲学に触れての感想を書き綴ってみました。

図書委員長より

本への興味

高松キャンパス 図書委員長
機械工学科4年 高橋 保陽

図書委員長の高橋保陽です。今は読書の秋ということで、図書館について書いていきたいと思っています。図書館では、たくさん本があり、小説以外にも漢検や英検、TOEIC等の資格を取得するために便利である本やレポー

トを書く際に使える専門の本があります。

また、映画をヘッドホンをつけて見ることが出来るスペースがあり、勉強できるスペースもあります。本の検索ワードを図書館のパソコンに打つことで本を探すこともできます。また、本を検索するためのQRコードを読み込むことで本を探すこともできます。

次に4月からの図書委員会の主な仕事をまとめます。まずはブックハンティングです。6月に宮脇書店さんへ本を買いに行きました。自分はレポートを書く際に便利

そんな本と最近話題であるひろゆきさんの『論破力』等の5冊買っていただきました。ブックハンティング等のおかげで最新の本が図書館に登場しています。入ってきた本が気になる方はぜひ図書館にお越しください。ブックハンティングは図書委員以外の皆さんも参加できます。次のブックハンティングに参加したい方はぜひ応募をよろしくをお願いします。

また、8月に第1回ビブリオバトルを行いました。これは5分以内に自分の気に入った本の内容を発表し、その後3分間の質疑応答を行うというものです。今回は3名

の方々が参加してくださいました。3名全員とても分かりやすく、また面白そうだなと感じました。この大会のコンセプトは、相手に自分の意見を分かりやすく伝えること、伝わることで本に対しての興味が湧くようにすることです。この大会は継続して行われ、また、優勝商品もあるため、参加したい方はぜひお願いします。今後も面白い発表を開けることを楽しみにしています。

私たち図書委員は皆さんに読書の楽しさを伝えるためにさまざまなことを行っています。これからも図書委員一同頑張らせていただきます。

図書館利用のすすめ

説間キャンパス 図書委員長
電子システム工学科5年 森岡 大介

みなさんは今まで何回図書館を利用したことがありますか。高専の図書館には一般の図書館には無い様々な特徴があり、利用しないのはもったいないと思います。

第一に、一般の図書館と比べて圧倒的に専門書が多いです。図書館には約8万6千冊の本がありますが、そのうち約4割は専門書です（H27年度データ）。レポートを作る際に専門書を使えば、インターネットより正確なことが分かりますし、伝えたいことを言語化する助けになります。上級生の方向けには専門書のほかに卒論の書き方を解説した本もあります。

第二に、ブックハンティングや廃棄図書の配布などのイベントがあることです。本校の図書館では毎年11月ごろに、高松市の宮脇書店本店に本を購入しに行きます。このイベントでは予算制限がありますが、気になってい

る本を実際に手に取って吟味し、欲しくなったら購入希望を出せます。廃棄図書の配布では、古くなった本や雑誌をもらえます。前回の廃棄図書の配布では、多くの学生や教職員の方が廃棄図書を受け取っていました。

このように、高専の図書館は様々な特徴があります。ぜひ図書館を利用して欲しいと思います。

最後となりますが、みなさんに本を借りて読むことをお勧めしたいと思います。近年はSNSや動画サイトなどで様々な娯楽を得られますが、満足感と知識欲を満たすには読書が一番の手段だと言えます。本を読むことで自分が経験したことのないような世界にどっぷりつかれます。例えば『キノの旅』ではおとぎ話のような国々を旅できますし、『金閣寺』では美しい金閣寺を燃やせます。『夢判断』を読めばあなたの見る夢の意味が分かるかもしれません。読書によって他の娯楽では得難い物を得られ、世界観が広がります。

本を読むことは学業の助けになるほか、生活を楽しむ手段になると思います。ぜひ図書館を利用して読書してほしいと思います。

専攻科生より



銃・病原菌・鉄

創造工学専攻2年
中川 虎琉

私が最近読んだ本の中に、『銃・病原菌・鉄』という本があります。現在、大ブレイクしている2ch創設者のひろゆきと、私の尊敬している嶋崎真一先生が絶賛している本です。本書は、アメリカの進化生物学者、ジョレド・ダイヤモンド氏による学際的なノンフィクション書籍で、欧米諸国がその他の地域よりも、文明的に優位に立てた要因について、科学的根拠に基づいて説明されています。また、本書の内容は、“たくさんの研究者たちの膨大な研究成果を武器とした、人種差別的な思想に対する反論”と捉えることができ、その点に、私はすごく感動しました。

ダイヤモンド氏が提唱した、世界における地域間格差を生み出した究極の原因は、環境の差異です。現アメリカ

政府のルーツであるヨーロッパに焦点を当てて考えてみます。ヨーロッパが栄えたユーラシア大陸は、その他の大陸に比べて地理的に恵まれていました。ユーラシア大陸の人々が、他の地域より早く、食料生産を始め人口を増やし、社会システムを構築し、文明を発達させることができたのは、様々な地理的恩恵を受けることができたからだと言われています。その後、銃・病原菌・鉄製品を持ったヨーロッパ人は、地理的問題で農耕を始めることができなかった狩猟採集民を征服しました。つまり、現代に通じる格差は、ユーラシアの知的、道徳的、または固有の遺伝的優位性に起因するものではなく、主に文明が発達した環境の差異によるものだと考えられるのです。

私が専攻科2年生まで学び続けられたことも、周囲のサポートなしでは絶対にあり得ませんでした。本書は、“日常においても環境が人に与える影響は大きい”ということ、1万3000年におよぶ人類史を裏付けとして、再認識させてくれます。歴史的・世界的にも名著として知られる『銃・病原菌・鉄』。私も読んで損はないと思いますので、ぜひ図書館に足を運び、手に取ってみてください。

僕と高専と本

創造工学専攻2年
山地 夢十

この香川高専に入学して7年が経ちました。入学当初は40人以上いたクラスメイトも、現在は10人となりました。専攻科に進んだ僕が上澄みなのか、そうでないのかはわかりませんが、自分なりにやるべきことはやってきたと思います。これまでの高専生活において図書館の本には、レポートやテスト前に何度も助けられてきました。また、本科から図書委員を担当しており、専攻科では図書館アルバイトを勤めています。こういった背景から、私の高専生活において、図書館の存在は大きな割合を占めていたと言えます。ここまで図書館に関わってきたのは、やはり本が好きだという想いがあったからです。

高専入学後は、自分の興味の赴くままに本を読んできました。ライトノベルやミステリー、純文学や学術書など色々なジャンルを手にとってきました。とはいっても読書数はあまり多くはなく、平均すると月1〜2冊程度だったと思います。その中で特に面白かったのは、森博嗣の

S&Mシリーズで全10冊の作品です。この作品は、大学助教授の犀川創平と犀川研の西之園萌絵が発生する様々な難事件に挑むミステリー小説シリーズで、1冊目が「すべてがFになる」というタイトルでメディア化もされており、知っている方も多いのではないのでしょうか。書いている作者自身も大学助教授の経歴があることから、作品には工学的な知識が各所に散りばめられており、その知識を元としたトリックや伏線回収には何度となく驚かされました。この作品は単なる娯楽小説として手に取りましたが、実際に読む中で自然と鍛えられた「論理的思考力」や「創造力」は、工学系の学生である僕にとって有意義な経験だったと感じています。図書館で実際に手に取ってみてください。

私は上述したように読書によって色々な知識や経験が得られたため、この機会に普段本を読まない人もぜひ本を読んでみてはいかがでしょうか？私が考える読書のコツは、自分の興味のある分野の本を手にとることです。実用書に限らず、私のように小説からでも良いと思います。どんな形であれ、継続的に読書をすることで数多くある本の中から、みなさん1人1人にとって最高の1冊にきっと出会えるはずですよ。

苦手な本

電子情報通信工学専攻2年
妹尾 伊央利

みなさんは普段どのような本を読んでいますか？私は親の影響もあり物心がついた時から今の歳になるまで、かなり多くの本を読んできたと自負しています。ジャンルはあまり偏りがなくSF、推理小説などのフィクション作品から、エッセイなどのノンフィクション作品も読みました。この高専に入学した理由も、推理小説に出てきた科学者みたいになりたいと思い、理系の道を志したのがきっかけでした。自分の過去を振り返るとこれもほんの一例で、私は本からの影響を強く受けて生きてきたなど実感します。

そんな私にも苦手なジャンルの本がありました。それは、自己啓発の本です。私にとって、自己啓発の本は説教

じみて面白くないという印象がありました。しかし、内定先の企業から課題図書として『その幸運は偶然ではないんです！』というキャリア選択についての自己啓発の本を頂きました。私は初めその本を読む意味を感じず、渋々読んでいました。ところが、読み進めると、私が描いていたキャリア選択の視野の狭さに気づかされました。私はこの経験や過去の経験から、どのようなジャンルの本も読んでみたら意外と良い発見があるのかなと思い、素直な気持ちで好き嫌いせずに読む本を選ぶことを心掛けています。

みなさんにも食わず嫌いで苦手なジャンルの本がある方、活字の本そのものが苦手な方もいるかと思います。しかし、そういった方々もまずは図書館に足を運んでみてください。そして、好みを問わず様々な本を少しずつでも読んでみることで、自分の中で何か良い発見があるかもしれません。みなさんが読書を通じて良い発見ができることを願っています。



ビブリオバトル紹介

8月10日(火)、学生の皆さんに少しでも本の魅力を感じてもらうために、図書館主催で「第1回ビブリオバトル」を開催しました。第1回目の今回は、13名の学生・教職員が参加し、高橋学生図書委員長による司会、佐藤学生図書副委員長によるタイムキーパーのもと、3名の学生が一人5分間の持ち時間で「夏におすすめの本」をテーマに自らのおすすめ本を紹介。発表ごとに参加者全員によるディスカッションを行い、紹介本についてのさらなる魅力を共有することができました。

すべての発表終了後に、「一番読みたくなった本」を選ぶ参加者全員による投票の結果、専攻科1年 森 悠輔さんが紹介した「独学大全」が初代「チャンプ本」として選ばれました。

<発表者と紹介本>

- ・創造工学専攻科1年 森 悠輔さん
「独学大全」 読書猿 (著)
ダイヤモンド社 2020年
- ・建設環境工学科3年 土田 虎ノ助さん
「恋する小惑星(アステロイド)」 Quro (著)
芳文社 2018年
- ・電気情報工学科5年 豊嶋 晃一さん
「モンスターハンター4 ザ・マスターガイド」
電撃Nintendo編集部 KADOKAWA 2013年



ブックハンティング紹介

●高松キャンパス

高松キャンパス図書館では、11月11日(木)に宮脇書店総本店(朝日新町)でブックハンティングを実施しました。

今回は、希望者を募ったところ、留学生を含む22名の学生が参加し、クラス毎のグループに分かれて選書を行い、専門技術、プログラミング、語学、資格取得、世界情勢、文学、歴史、趣味など、様々な分野で思わぬ本との出会いがありました。

選ばれた本は図書館のブックハンティングコーナーに展示しています。

興味のある方は図書館にお越しください。きっと新しい発見があります。

※こんな本が選ばれました。

- ・全国未成線徹底検証(国鉄、私鉄)
- ・羽生善治の受けの教科書
- ・OpenCVによる画像処理入門
- ・業屋のひとりごと6

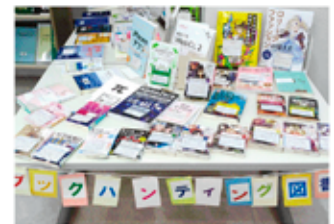


- ・基本情報技術者パーフェクトラーニング過去問題集
- ・生命、エネルギー、進化
- ・すぐそこにあるサイバーセキュリティの罠
- ・現場で使える「力学の教科書」
- ・世界の名建築ヒストリア

●詫間キャンパス

詫間キャンパス図書館では11月14日(日)に、宮脇書店本店(高松市丸亀町)でブックハンティングを実施しました。11月にしては暖かな日曜日に、4・5年生を中心に1年生から専攻科生までの11名が参加しました。今回は、選ばれることの多い専門書・小説・ベストセラー本以外の分野(人文・社会科学系等)にも目を向けてブックハンティングをしてもらいました。各人予算を一杯使い、全体で約1時間半かけて80冊ほどの本を選びました。書店の中から皆思い思いに選り出してきた本は、購入しようと狙っていた本から、書棚の隅っこから掘り出してきたような本まで様々です。

選書された図書の内、既に購入済みだった図書を除いた約70冊を受け入れて、新着図書コーナーに展示していますので、図書館に来て、ぜひ手にとって見てください。タイトルを眺めるだけでも楽しいと思います。



※こんな本が選ばれました。

- ・大学生のための例題で学ぶ化学入門 第2版
- ・サクッとわかるビジネス教養 行動経済学
- ・Direct3D 12ゲームグラフィックス実践ガイド
- ・ソードアート・オンラインプログレッシブ
- ・その日、朱音は空を飛んだ
- ・円周率1000000桁表
- ・これが本当のCAB・GABだ!

図書館からのお知らせ

1. 両キャンパス間の相互貸出をおこなっています。読みたい本が図書館にない時等は気軽にカウンターへ声をかけてください。
2. 本、CD、DVDの購入リクエスト、貸出中の資料の貸出予約も常時受け付けています。

3. 蔵書検索はこちら

読み取れない場合は、

https://libopac3-c.nagaokaut.ac.jp/opac/opac_search/?kscode=041 にアクセスするか、**高専ホームページ**→メニュー「施設案内」→「図書館」→「蔵書検索」をクリックしてください。



図書館閲覧室の開館時間

平日 8:30～20:00
(長期休業中は17:00まで)

土曜日 10:00～16:30
(長期休業中以外)

※詳細は図書館(開館)カレンダーをご確認ください。

※自然災害等により臨時閉館する場合があります。

一般利用者(保護者)の皆様へ

本校の図書館は、一般の方へ開放しており、貸出(予約)も可能です。理工系図書が中心ですが、香川県郷土資料や教養・実用・娯楽の図書、雑誌も多数取り揃えていますので、是非ご利用ください。

なお、学校行事等で開館日の変更することがありますので、来館される場合は、香川高等専門学校ホームページ(メニュー「施設案内」→「図書館」)に掲載している図書館カレンダー及び図書館利用案内を確認してからお越しください。